再び狛ブーの個人化／社会化機能について

狛ブー元年間講師（徳島大学大学開放実践センター教授）
西村美東士

去年は「個人化を実現するための狛ブーの社会化機能」というタイトルで、この『いなほ』に原稿を書いた。ぼくは今年も引き続き、個人化／社会化についてこだわっている。

まずは、最近の自著を紹介したい。鈴木眞理編集代表『生涯学習社会の社会教育』（学文社）シリーズの第6巻『生涯学習の計画論・施設論』で、ぼくは「青少年教育施設の活動・経営をめぐる問題」の章を執筆した。２００３年３月発行予定である。

現在、国公立の青少年教育施設は千以上ある。1985年の臨時教育審議会第1次答申以降、青少年教育施設はその「個性重視」の考え方に大きな影響を受けながら展開する。そこでは、団体宿泊訓練に象徴される従来のアイデンティティを、個人化傾向という時の流れとどう整合させるかということが問われた。

一方、青少年が引き起こす「問題」が社会を大きく揺るがすたびに、個人化を否定し、規範意識の形成等による社会化等を説く議論も蒸し返された。

このような個人化／社会化の二項対立と無限循環の問題は根が深い。個人にも深刻な影を落とす。他者との同質化というある種の社会化過程が、自己の異質性等をかなぐり捨ててでも実現しなければならない重荷になっている。

団体宿泊訓練が目指してきたものは本質的には「個人がどのように生きていくか」であった。「他者との出会い」を通して、結果的には社会化を促すというその教育機能は、青少年およびそれを取り巻く社会が直面する個人化／社会化の二項対立を実践的に乗り越える可能性をもっている。今後の青少年教育がめざす社会、公共、対話、参画などの究極的な主体はあくまでも個人であり、その個人化は敬遠されるどころか、より望ましい社会化につながるものとして歓迎されるべきなのだ。

以上のような趣旨で執筆した。このような観点で、公民館という「広義の青少年教育施設の一部」で行われる「青少年教育事業」として、狛江プーター教室を見てみよう。狛ブーが示唆する個人化／社会化の二項対立を解決する道筋は、鬱の現代を切り開く意義をもっている。

それは現在の年間講師である榊原正博さんが、去年の『みずほ』に発表した「これまでの狛ブー、これからの狛ブー」というアンケート調査を丹念に読み込んでみれば明らかだ。もしかしたら補完のための追調査が必要になるかもしれないが。いずれにせよ、あの調査は見た目以上に示唆に富むものだ。

ここでぼくなりに榊原さんの調査を分析しておこうかと思ったが、やめておく。それより、現在の講師（榊原さん）さらにはメンバーも含めて、自分たち自身でもう一歩つっ

こんで分析したほうが、ぼくが一人で抽象的に論ずるよりもよっぽど立派な成果が期待できる。もし、ぼくも片隅に入れてもらえるのなら、データを共有して、いっしょに議論させてもらえたらうれしい。あの調査を大事に育ててほしい。社会化に向けた切実なニーズをもちながらも、「自分らしく生きたい」という止むことのできない願いとぶつかり、そこに葛藤しながら生きている若者たちにとって、あの調査とそれに基づく「榊原理論」は大きな意義をもつことになるとぼくは考える。

さて、ぼくは、去年の10月、徳島大学大学開放実践センターで開かれた「日本産業教育学会」で、ラウンドテーブル「最近の若者の労働観と生き方を考える」を主催した。このラウンドテーブルでは徳島でアクティブに活動している若者たちが「定職に就くということ」、「仕事の楽しみ」、「自分らしく生きることと仕事との関係」、「自分より若い人たちの仕事ぶり」「教育や学びと職業との関係」などについて語り合った。(日本産業教育学会『産業教育学研究』第33巻1号、2003年1月)

そこでのキーワードの一つは「フリーター」であった。しかも、それはもっぱら「定職を避けてフリーターに逃げようとする若者たち」の問題としてではなく、「フリーターであることを避けるために、好きでもない仕事に就く(登壇者より)若い世代」の問題として語られた。このように時代は「働きがいを犠牲にした定職志向」、「個人化を断念した社会化」に突入しつつあるのかもしれない。そこでの議論を通して「自分のやりたいこと」を大切にするいわば「主体的フリーター」の存在が浮かび上がってきた。

本大会が開かれた翌月に宮本みち子著『若者が《社会的弱者》に転落する』(洋泉社)が刊行された。そこでは久木元真吾によるフリーターの選択に関する言説の分析を引き、親も子も「やりたいこと」の呪縛にとらわれ、結果として現実逃避が続いていると指摘している。また、「安定雇用というものに魅力を感じなくなった」子どもたちにとって、日本はまだ「若い時期から実社会で活躍できる」土壌が少ないのに、「アルバイトする半労働者として、成人に達する前から、将来の保証も上昇の見通しもないまま、流動化する人生を開始しているようにみえる」として、そういう若者たちの傾向を否定的にとらえている。ぼくはこれを読むと、狛ブーの「ブータロー精神」が「弱者」のものとしておとしめられたような淋しさを感じる。

しかし、本ラウンドテーブルにおける若者リーダーの発言からは、「やりたいこと」を社会との相互関与の中で自らつかみ取り、その「やりたいこと」については不変なものを求めて、「主体的」に流動化する若者の姿を見ることができた。「好きな店であこがれるマスターの元で」いきいきとアルバイトする学生の姿も知った。そして、むしろ、登壇者より若い世代に「やりたいこと」の模索や実現をあきらめてしまう傾向があり、そこにこそ危険があることが問題として把握されたのだ。

青少年教育は「やりたいこと」を実現しようとする彼ら

の意思や、さらには個人化そのものの側面をもっと肯定的、積極的に評価する必要があるのではないか。その上でこそ、「近年のEU諸国の青年政策」に習い、「若者を社会の構成員として明確に位置づける」という宮本の提唱もより現実性のあるものになると考えられる。登壇した3人のような若者の予備軍はまだたくさんいるだろう。そういう若者たちの模索さえもが「現実逃避」と見なされ、彼らの行き場を奪ってしまう結果にならないようにしたい。